

真吉の支援者木戸家とは？

真吉の武者修行の背後に居たパトロン木戸庄蔵



●四十万市図書館に「木戸家の歴史」という本がある。現在は四十万市京町で木戸薬局を営む木戸家の歴史が、かかれた本である。実はこの本の背景には「上岡文書」といわれる上岡家親子三代に渡って中村の商家七十四家の故事来歴について調査研究した資料が現存しており、その一部で版された本が「木戸家の歴史」である。

●元禄二年(1689)中村藩が廃絶になった。その時点での侍名簿によれば知行取り七十四人、扶持人六百二人、計六百七十六人とこれが伴う家族の武士階級が居なくなった訳だから中村の町は火が消えた状態になった。江戸幕府もひどいことをするではないか。これを機に中村に幡多奉行所が置かれ、中村の政治は商人の自治により行われたとされている。

そもそも木戸一族とは？

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人

会長
土森正一文責
寺尾敏夫

幡多・木戸家偉人群像

上岡正五郎作

	氏名	生年月日	没年月日	年齢
1	文右衛門義道	享保11年 1726 1月16日	文政2年 1819 3月18日	94歳
2	貞蔵重直	宝暦1年 1751	文化15年 1818 5月28日	64歳
3	不識庵子現(栄蔵)	宝暦4年 1754	文化11年 1814 2月17日	61歳
4	文右衛門直道	天明1年 1781 4月4日	安政5年 1858 5月3日	78歳
5	翠庵此君(永蔵)	寛政4年 1792	明治3年 1870 10月22日	79歳
6	広之助良直	文化3年 1806 11月23日	慶応1年 1865 3月4年	60歳
7	庄蔵直賢	文化7年 1810 11月11日	明治4年 1871 10月19日	62歳
8	明(駒次郎)	天保5年 1834 6月23日	大正5年 1916 9月13日	83歳
9	麟	嘉永1年 1848 12月25日	明治34年 1902 1月17日	53歳
10	庄之助	安政2年 1855 6月15日	昭和11年 1936 10月2日	82歳
11	啓	慶応3年 1867 12月30日	昭和20年 1945 6月5日	79歳
12	小三郎	明治3年 1870 9月22日	大正14年 1925 3月5日	55歳

だから個々の商家の生業から家系図に至るまでの詳細な資料は、正に江戸時代元禄以降の中村の歴史をも表現しており、その「上岡文書」は高く評価されている。この資料は四十万市郷土博物館に寄贈されているが、正に個人情報報の塊の資料でもあり、市当局が一部開示しない部分があつて問題になっている。ただ木戸家に就いては出版されたのでこれを閲

●木戸家が幡多にくるまでの遠祖については「木戸明記録」がある。

木戸家の遠祖

覧できるのは幸いであるが、木戸家にとつては心外に思われるかもしれない。この本はどうか？発行部数はないか？発行部数は極々僅かであつたと思われ、現在では図書館にあるこの一冊が唯一の存在かもしれない。

木戸家一族の特徴

●右上にある表は上岡正五郎先生の作られたもので木戸家の特徴について次のように書かれている。「木戸家と云えば現代でもそうであるけれど、特に藩政

「余幼児祖父文右衛門の常に語るを聞いた。曰く我家はかつて豊臣家に仕え、摂州吹田に住した。主家が亡びてのち佐賀に來りて住み二世の時中村愛宕町に移り住したが四代喜兵衛の宝永大火(1701)「(一)」にかり系譜を消失した。祖父文右衛門は(中略)長じてのちに父広之助に申し伝えて記録させて一巻を得たが、僅かに七世の祖にとどまるのみ。従つて元祖は誰であるか、その姓(かばね)は何氏であるかを知る事が出来ず、ただ僅かに名字が木戸であることを記しておるのみ。余深くこれを痛み、朝夕玉鬘宮を排する毎に姓を教えて下さることを願つた。(以下略)」とある。

時代には経済的にも極めて優位な家であること、又血族的にも枝繁く繁栄していること、その他色々の面において特徴のある家であり、学者、有名人、有力者を輩出しており、町人のなかでも屈指の名家として、誠に特異な存在であるからである。元来藩政時代には士農工商の身分格式はやかましく、町人はその最下位におかれて、全くだちらを向いても頭が上からず、しかも藩庁からたいした庇護を受けるでもなく、ひたすらに自己の利益追及によつてのみ、その保全を期さねばならぬ誠に憐れむべき階級であつたが、しかし木戸家は藩政期のみを言つても四代文右衛門以後四代の長きに渡つて、歴代よく蓄積して、中村財界のトップクラスを幕末まで保持してきたことは全く驚異に値することであり、殊に現代にも増して災害の町中村であつてみればなおさらその感を深くする。しかも明治以降もこの伝統は続いて、幾多の

●樋口真吉の刀を説明中の現木戸家ご当主



○学問の家

起伏こそあれ有力者を
だしている。・・・
そして、具体的な
木戸家を次のように表
現している。

●上岡正五郎先生が青
年の頃、木戸竹葉堂は
年頭の新聞紙の一面に
広告を出すことを常と
し、その紙面に忘れら
れない言葉があったと
いう。それは「土魂商
才」でこれが町人吸田
屋(木戸家)の伝統で
あろうと記している。
●「木戸家は元来豊臣

の家臣の家であり、豊
臣家没落の後土佐へ流
れ来たもので土佐の初
代源右衛門道久はれっ
きとした武士である。
木戸家に脈打っている
伝統は、土魂の家であ
り、そのプライドを持
ち続けた生活や行動で
あると云えよう。」と。
そして「家を尊重しそ
の伝統を盛り立てる気
風」「教育を重視する
気風」「町人ながら武
道修行者が多い気風」
「礼儀を尊重し、しつ
けを重視した気風」が
木戸家の特徴だとする。
●江戸時代は百姓町人

○施しの家

等一般庶民は無学文盲
が多いが、これは学問
を必要としな時代で
もあった。しかし木戸
家は歴代頭脳明晰優秀
な人物が揃い、知恵の
家木戸家との定評があっ
た。土魂の伝統に培わ
れて学問を好む者が多
く、子現や文右衛門、
明、麟、庄之助等幾多
の学者的人物を出して
おり、更にこの学問が
中村の地域社会によく
生かされ、指導者の家
ともなっている。

●中村は地理的に洪水
の被害に脆弱な立地に
あった。後川の堤防が
出来たのは昭和になっ
てであり、下記地図を
みれば明らかである。
その度に被災者の救済
に木戸家は多額の資金
を出している。上岡正
五郎先生曰く「木戸家
史資料を見て驚嘆する
ことは、よくもあれだ
けの巨額の寄付金、見
舞金を幾多の機会にお
いて、藩庁に対し或い
はまた一般庶民に対し
贈ることができたかと
いうことである。国又



は藩の社会福祉施策の
極めて乏しい時代のこ
とであるから、災害等
に遭遇した庶民の困惑
振りには想像に難くない
が、度重なる大変で
ある。安政地震におい
ても全潰、焼失をしま
がらも、あえて巨額の

寄付をし、幕末多事
の時、銅器類献上運動に
当たっては、我が家に
只一物の銅片すら残さ
ず、この運動に率先参
加したり、木戸家の歴

○趣味の家

自ら木戸明が行うなど
海防に尽力している。
●「趣味の道は心の幅

代が慈善義損を好み、
己を空しゅうしてまで
行うという在り方に対
して全く頭の下がる思
いである。」と。それ
ばかりか幕末の海防に
関しては大砲の製造に
多額の寄付を行い、三
十八門の大砲の製造を

のある人、精神的ゆと
りのある家でなければ
出来ぬものであり、し
かも経済的に余裕のあ
る家でないこと、その道
に徹することは容易で
ない事であるが、木戸
家にはそういう趣味豊
々な人々が極めて多く、
しかもそれが田舎道楽
者の域ではなくて、そ
の道の本格派の趣味人
とまで修行している人
の多いことも驚異であ
る。不識庵子現の俳諧
絵画。貞蔵の茶道、華
道。翠庵此君の俳諧。

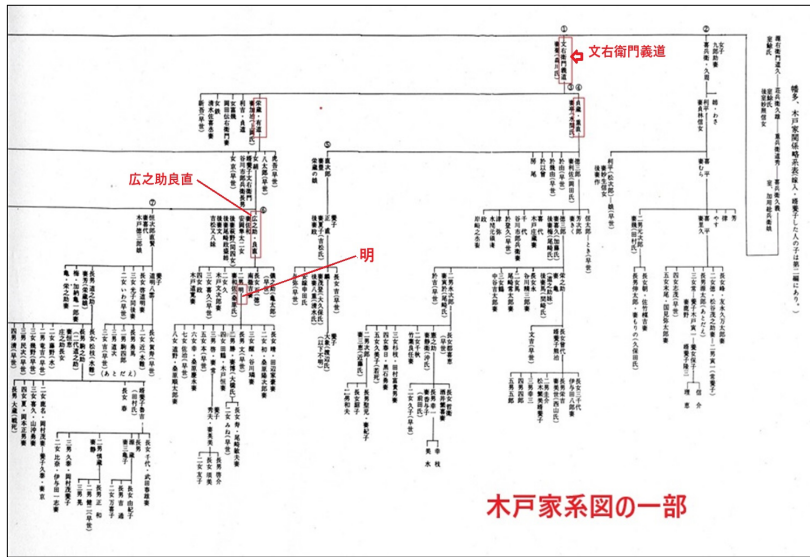
文次郎俳諧。明の漢詩、
書道。庄之助の俳諧、
絵画、書道。道之助の
謡曲。小三郎の浄瑠璃
等々誠に多士済々、以
下の人物編の中に多
面で登場するので、そ
れぞれ読み取ってほ
いことであり、この伝
統は現在にまでも続
いていることは誠に心強
いことである。」と書
かれていて、恐らくは
各趣味に就いては同好
のお仲間が居たはずで
中村にその文化の広が
りが想定できますね。



○先祖崇拜の家

●繁栄している一族は必ず先祖供養・神仏崇拜を遵守している。木戸家もさすがに例外ではなかったことが記載されていた。徳川家康の菩提寺は岡崎市の大樹寺であり、家康は松平家の九代目として供養されていて、今なお徳川家の末裔の皆さんは大樹寺詣でをされて

いると聞いている。悲しいかな豊臣秀吉にはこの知恵が無かったことは歴史の示す通り。木戸家の先祖供養の方法についてもこの項に詳しく書かれている。先祖と共に敬神の家の伝統を木戸家一族が遵守されてきたことが、豊臣政権崩壊後の様々な苦難を経て、木戸家が四百年の繁栄を堅守できたと繋がっていると思われる。



木戸家系図の一部

○次男継承の家

●徳川家を見るまでもなく一般にも家督を継ぐのは長男として、代々の木戸家では次男継承の例が多いと書かれている。木戸家の記録で「これより前に在つては常に長子が家を継いだ。すると天福が乏しく、ここ(四代文右衛門)に至つて次男が家を継いだところが天福がきた。ここにおいて二男が本家をつぐのを吉とした。」とある。商いは失敗できない故に木戸家として細心の注意を払って後継を見極めたということか。

○長寿の家

●戦後の前半までは男の六十歳を祝う風習があったが、今はない。木戸家では六十を超えて八十、九十と長寿で事業を支えてきた人物が目立っている。上岡正五郎先生はこの点に注目しており、一族で健康維持に長けていたと指摘していた。

広之助と庄蔵と樋口真吉

●上岡正五郎先生は上岡家三代に渡つて調査した資料から木戸家の歴代の当主の人物像を描いている。一ページに表示した木戸家の十二名は単に歴代当主を順に並べたのではない。木戸家偉人群像としており、このお一人お一人が偉人として紹介されているから凄い。

■1 文右衛門直道
天稟非凡、商才に富み、しかも少年の頃からひたすら商売に挺身した。十三歳の時、宿毛や下ノ加江の親戚筋に行商に行き、一途に家の興隆をこいねがって苦勞を重ねた話は、後々までも木戸家の語り草になった。この努力がやがて家運次第に隆昌となつて天運も加わつて、文右衛門一代のうちに幡多郡屈指の富豪と称せられるに至つた。

■3 不識庵子規(栄蔵)
単に木戸家の当主として事業を発展させたばかりか、文人として中村の俳諧の祖として大活躍している。安永年

間に美濃蕉風獅獅門下にて相当の地位を保持しており、美濃の宗家を訪問し、或いは宗師を中村に迎えるのみならず、同門俳句誌を大坂の出版社で出版するほどであった。

■4 文右衛門直道
「吸田屋は先々代文右衛門の代に郡中屈指の大商人となり、先代栄蔵はその財を確保したが、養子文右衛門は卓越した頭脳才能をもつてさらに家業を拡充盛大にした。木戸家の長年の藩庁への献資のおかげで文右衛門は士農工商の中の農・百姓になった。百姓になるのは別の意味があった。当時は銀行的貯蓄などの利殖の手段がなく、タンス預金では洪水火災の災害時に遭えばたちまちに財産は喪失してしまふ。だから財力を堅持するには土地畑畑を購入することが最も堅実な方法であった。その際に新田なら容易に保有できたが本田つまり年貢を納める田畑

は百姓でなければ持てなかつた。だからこそ広之助が百姓の位を得ることに願望の意味が実はここにあった。天保十五年(1844)の財産目録が資料としてあるが何と総額が三千石という莫大な資産形成がされていた。

■6 広之助吉直
文化3年生まれで真吉より九歳年長である。「木戸家は士魂の家であり武士への憧れの深い家であるが広之助の時代はあたる幕末の端の時に遭遇し、その道を一步一步前進しているように思われる。」とあるから真吉とは何かと接触・交流があったのではないだろうか。「樋口真吉日記(上)」103頁以降にこの間の描写がある。文右衛門時代に既に苗字帯刀を許された木戸家、広之助は民兵を志願して採用になった。野戦砲を買い入れて高知から中村に運ばせる役を真吉が請けて金銭のやり取りの記載が真吉の日記に見える。広之助は町人の枠を超えて海防に率先して取り組んでい

■3 不識庵子規(栄蔵)
単に木戸家の当主として事業を発展させたばかりか、文人として中村の俳諧の祖として大活躍している。安永年

■3 不識庵子規(栄蔵)
単に木戸家の当主として事業を発展させたばかりか、文人として中村の俳諧の祖として大活躍している。安永年

木戸家当主と樋口真吉の交流 (番号は当主の順位ではない)

	氏名	江戸時代			明治時代		
		生年月日	没年月日	年齢	生年月日	没年月日	年齢
5	文右衛門直道	天明1年	1781	安政5年	1858	78歳	
6	広之助良直	文化3年	1806	慶応1年	1865	60歳	
7	庄蔵直賢	文化7年	1810	明治4年	1871	62歳	
	樋口真吉	文化12年	1815	明治3年	1870	56歳	
8	明(駒次郎)	天保5年	1834	大正5年	1916	83歳	

弘化三・正月	中村	駒次郎
安政二・九月	布村	清吉
堀田取立	大井川	藤太郎
	大井川	虎次
	大井川	有作

月入門・文久三年1863
5月初伝とあるので
初伝を得るのに八年を
要しており熱心に頑張つ
たと云えよう。安政二
年には文武館が完成し
ているので**理之助**は文

と考えています。

今回「**木戸家の歴史**」を手にとって江戸時代の教科書の歴史ではなく郷里中村の歴史について啓発されました。以上の理由で会報誌を総会の資料とした関係で会報誌の発送を総会后にさせて頂きますことをご了承ください。

●宿毛市は従来から歴史を大事にしています。昨年「**日本を築いた宿毛の人びと**」を発刊した。乞願うご一読。